

磨きすぎた「女子力」はもはや妖刀である

将来訪れる「友人格差」

編集S では、家庭とか家族の話に移りたいと思います。

私自身、家族がいないと生きていけないという実感があまりありませんし、そもそも結婚自体もしたほうがいいのかどうかよくわからない時代ですし……家庭を持つ意味とか、今後の家族像とか、どう変わっていくのかといったあたりをお聞きしたいんですが……。

西森 私自身は結婚していませんが、一般的には、離婚率は高まっているし、死別もあるから、未婚だった人も結婚していた人も離婚した人も、おばあちゃんになったときは結構フラットに、同じような感じになるのではないかという気がしています。

編集S 今は分断されていても、ですね。

西森 そうです。先日、友達がドイツニーランドに行ったら中高年の女性同士のグループがすごく多かつたらしくて、その話を聞いて結構いいなと思ったんです。古市さんの世代

ぐらいだったら、男性も年をとってから友達とデイズニーランドに行くかもしれない。昔のマッチョな人たちにはできなかったことが、たぶんできるようになっていくのだろうし、女性はもともとそういうことができていましたよね。友達は、その中高年女性四人組を見て「あれがサマンサで、あれがキャリーだ！」とか言っていました。

水無田 年季の入った『セックス・アンド・ザ・シティ』⁶⁵ですか(笑)。

西森 おばあちゃんになっても『セックス・アンド・ザ・シティ』的な友情があるなら希望だなと思いました。

古市 そうなると、友人をつくれる人とつけれない人の格差という問題が出てくるのではないでしょうか。結婚できる・できないというのがかつての格差だったとしたら、今度はそれに加えて、友人ができる・できないというのが新しい格差として前景化してくるのかもしれない。

最近、单身高齢世帯の増加(資料17)が話題になっていますよね。今の高齢者たちは兄弟も多いし、子どもも一人、二人とかいるから、世帯としては单身であつても、なんとかなることが多い。だけど、今四〇代の一人っ子、それも子どもがいらない人たちがこれから六〇代とかになれば、本当の单身になるわけですよ。そこで、友人がいるかないかというものがすごく大きな問題になると思います。

65 『セックス・アンド・ザ・シティ』

ニューヨークに住む三〇代独身女性四人の生活をコミカルに描いた、アメリカの連続テレビドラマ。このドラマを見ていない女性たちも、女子会を行ったり、そこであつげらんとか性的なトークを繰り広げたりと、知らず知らず影響を受けている人も多い。

(西森)

西森 社会保障的なことも少なくなっていますからね。

古市 そうなんです。社会保障が家族からも期待できない、国からも期待できない、友人もいないとなると……そこでの友人格差というものがすごく重要だという気がします。

水無田 確かにそれはありますね。

古市 最近では、クリスマスよりもハロウインのほうがつらいなと思うんです。ハロウインは恋人ではなくて、仲間たちで盛り上がるイベントになっているから、誘われないと本当に寂しいんですね。

水無田 それは、今までなかった文化ですね。逆にハロウインが大変なんです。

千田 ただ、友達格差でいうと、例えば私立の一貫校に通う人は、それこそ幼稚園、小学校からずっと一緒で、そういう人たちは、すごいネットワークを持っているわけですよ。

西森 それは、社会に出てからも結構関係があるのですか？

千田 ある。

水無田 相当ある！

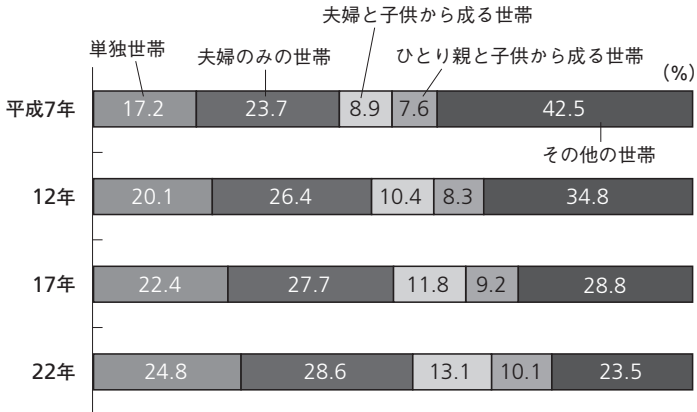
西森 ええっ、もう格差社会ではないですか！

千田 そうですよ、社会的なネットワークの格差です。そういうネットワークは、すごく無視できない強さがあるんですよ。

水無田 それが彼らのソーシヤル・キャピタル⁶⁶（社会関係資本）ですからね。

[資料 17]

65歳以上世帯員のいる
一般世帯の家族類型別割合の推移



単身高齢者が増加している。未婚者の増加によって、この割合は今後もますます高まっていくだろう。アラフォーシングル女性をターゲットにした雑誌『DRESS』創刊号でも、「単身高齢者」問題への言及があった。ちなみにシングル対象のくせに、『DRESS』では「恋」「結婚」というキーワードが頻出する。(古市)

資料)平成22年国勢調査解説シリーズNo.2「我が国人口・世帯の概観」

千田 今の私たちの世代は、まだ親があまり負の遺産を持っていない、子どもを援助できる立場であるからいいのですが、私たちの世代が親になった場合はものすごい格差ですよ。親から援助がもたらえるか、親に仕送りしなくてはいけないかというのは、ものすごい差として表れてきます。

西森 なんだか暗くなる感じです。

そういえば、主に専業主婦の女性をターゲットにしている『VERY』（光文社）という雑誌がありますが、最近お受験に対しての考え方が変わる特集とかが出ています。お受験して私立に下から入れるよりも、公立でしっかり勉強させようというような考え方で……。でもそれは、格差を考えずにのびのび育てようという意味ではなくて、最終的に東大とか慶応とかに入れるのならば一緒ではないか、という意味だったんです。普通の学校に入ったら、サバイバル能力などが養われるから、学力だけでなく、より強い、能力の高い子に育つのではないかという特集なんです。

千田 私もその特集を読みましたけれど、橋下改革を支持していて、「橋下さんがいるんだったら、引っ越ししても行きたいわ」みたいなことが書いてありました。「やっぱり学校選択制はいいわね」とか書いてあるのですが、結局選択して公立に行くんだったら、私立と変わらないじゃん、と……（笑）。公立の同質性のようなものを求めているわけでは全然ないんですよ。

西森 すごい公立^クに行きたいということですよね。

千田 そうそう。根本的には全然変わっていないんだと思って、笑えたんですけどね。

水無田 それから、地元志向というのは、東日本大震災以降強くなっていますよね。

ちよつとできる子は、以前なら無理して都心部の学校に行かせていたのが、最近はそうでもない。いざというときに電車が止まったり、携帯が通じないとやっぱり怖いし、この先地震も頻発するだろうし……。近くにおいて自転車で駆けつけられるぐらいのところをやっぱりいいよねというふうになってきています。

千田 だから、「それぐらい近所にある有名な学校に行けばいい」というような話に、たぶんなりますね(笑)。

西森 それは、生まれたときからの格差みたいなもので、そこで得られる人間関係は、階層でもう決まっていますよね。例えば韓国だと、結構貧乏な人も学歴で一発逆転ができるかもという……。「学歴だけが階層を変えられる」というような夢を持っているというのがあります。日本ではもうそれもダメということですか？

古市 一応、それはまだ夢としては残っているのではないのでしょうか。いい学校を出たらいい会社に入れるというのが壊れていることはわかりつつも、でもそれにやっぱり乗るしかない人がまだまだいると思います。

66 ソーシャル・キャピタル

良好な人間関係を示す社会学用語。これが衰退すると、コミュニティの人間関係も希薄化し、ひいてはさまざまな生産活動も衰退してしまう……。というもの。ソーシャル・キャピタル研究の第一人者ロバート・D・パットナムは、『孤独なボウリング 米国コミュニティの崩壊と再生』(柏書房)で、かつては地域のクラブに属したり、家族や友人同士でにぎやかに遊ぶはずだったボウリング場で、黙々と一人ボウリングに勤しむ人が目につきたったことから、これを論じた。(水無田)

千田 でもそれは、たぶん上の階層の話ですよ。そういう人は、階層戦略というものが見えるんですよ、こうすると階層が上がるんだということがわかる。だから、いい大学を出てもいい就職があるとは限らないけれど、でもそれがないとやっぱり何もできないんだと考えるから、子どもをいい学校に入れようとするわけです。

例えば、**ホリエモン**⁶⁷はある時期、時代の寵児のように言われていましたけれど、彼は東大を中退しているんですよ。「学歴がなくても……」というのは、これはやっぱり欺瞞^{ぎまん}だと私は思うんです。

古市 努力できる・できないも階層差に規定されるのかという荻谷剛彦さんの有名な研究がありますね。階層が上の人は、本を読んだり、何かを調べたりという広い意味での「努力」が子どものころから当たり前だから、普通に勉強もできたりします。

千田 それはあるでしょうね。例えば「子どもをのびのびと育てたい」と言う親がいますが、本当にのびのびさせて親が何もしないのはまずいわけですよ。たぶん競争に負けてしまいます。

水無田 階層上昇とか社会の中でうまく乗り切っていくための武器の使い方、とか、そういうことがある程度わかっている親なら、のびのびでも別にいいんですよけどね。
千田 お受験させる親を見ていると、うまい人は、受験をさせるんだけど子どもの様子を見てダメだったら手を引いたりとか、そういうさじ加減が絶妙ですよ。それはやっぱり

りよくできる人なんですよ。そうでない人は「まわりがやるからやらなきゃ」といつて、「勉強しろ！」とか言って子どもをつぶしてしまおう。東大生でもよくできる人は、「勉強しろ」とか言われたことのない人が多いです。

西森 まわりを見て、というのはいち方向にいかなそうですよ。

水無田 お受験サークル型ですね。それが一番ヤバイです。

親自身も受験して、その中で勝ち残ってきたから、子どもにもやったほうが得であることはある程度理解している。そういう親は、子どもが向いていないと思ったら、先ほど千田さんがおっしゃったように、さじ加減がうまいんです。

それからもう一つ、子どもの学歴に対して、親の資質から一番優位に影響力があるのは、なんとといっても母親の学歴で、父親ではないんですね。受験勉強の進め方なんかも、日常的に接しているの、よくわかっているんです。

だから、自分は学歴が低いけれども、子どもに夢を託して、まわりのサークル的なノリで子どもに受験をさせちゃうというタイプの母親が、ストレス値も最も高いのではなかったですか？

千田 そうだと思います。片岡栄美さんによれば、女性の場合は、芸術文化活動と学歴の相関が高いそうです。つまり高学歴女性ほど**文化資本**を持っていて、これは親の文化資本が相続伝達されているんじゃないか

67 ホリエモン

堀江貴文。実業家、元ライブドア代表取締役社長CEO。一九七二年生まれ。東京大学在学中にホームページ制作、管理運営の会社を立ち上げ、急成長させた。プロ野球の球団や放送局の買収、総選挙立候補など多岐にわたるが、証券取引法違反容疑で逮捕、起訴された（ライブドア事件）。

と。経済的な条件が許せば、高学歴を期待する親ほど、女の子に文化的な経験をさせるそうです。ただ男子は家庭の経済的条件がよくても、芸術活動率は女子ほどは高くないらしいです。女の子にはやっぱり習い事をさせる、お母さんも教養がある、学歴期待も高い、そういうことができる人が階層的に高くなっていくんですね。

水無田 すごくわかります。見えないものなんですけどね。

千田 そう、見えないものなんですけど、如実にあるということがわかります。

水無田 そして、再生産されていくんですね。

墓守娘になりたくない女子の『孤独死万歳!』

編集S では、これからの家族像についてはどうお考えですか？

千田 家族は資源だけど、実は足かせでもあるんですね。例えばパラサイトしている人は、親からいろいろな援助を受けていますが、これからは親の介護が始まるわけです。夫婦でも、ダブル・インカムの方が得というか柱としては太いのですが、相手が倒れたときは支えなくてはいけないというリスクがある分、シングルとそんなに変わらないと私は思っています。親族ネットワークもダブルになるとはいえ、先ほど古市さんも触れていたように、一人っ子の多い世代だと広がりもあまりないわけです。